

---

# RED DRAGON

紅玉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

RED DRAGON

### 【Nコード】

N7307A

### 【作者名】

紅玉

### 【あらすじ】

平和を願っただけなのに、悲劇は起こった。呪いを持つ少年「ルシア」とドラゴンの「ドラン」の物語。何故、彼らは罪を背負わなければいけないのか？争いは悲劇を生んだ -

## プロローグ（前書き）

以前、短編として出していたものですが、アドバイスにより、見易いように連載へと手直しさせて頂きました。  
内容の大きな変更はありません。  
少しでも心に残ればと切に願っています。

## プロローグ

白き龍は、罪を犯した。

その身は罪の色に染まり、洗っても落ちない。

洗ってもー。

洗ってもー。

罪は消えない。

いつまでも。

紅い龍のまま。

## 第1話 ルシアとドラン

「いい眺めだなあ」

15、6の少年は紅いドラゴンにまたがり、下界を見下ろしていた。

「そうか？ 私には、どの景色も同じようにしか見えん」

と、紅いドラゴンは下界を見た。

「人間のやることなど、何処へ行ってもたいして変わらんよ」

「町並みもそうだけど、風に吹かれる木々のざわめきや海へと続く川が陽に当たって反射する光がきれいじゃない」

少年は、にこにこしながら言った。

「そんなの見て何がおもしろい」

と、紅いドラゴンは鼻で笑った。

「もう、ドランは風情つてものがわからないんだから」

と少年は、膨れた。ドランはそんな少年の言葉を無視して、森の中に降りた。

「よっと」

少年はドランの背中から飛び降りた。

「じゃあ、町へ行つて来るよ」

と少年は、振り向いた。

「いざという時は、その笛を鳴らすのだよ。お前はいつも自分の力でなんとかしようとするが、その命は今やお前の命だけのものではない。私は、いつもギリギリの場面でヒヤヒヤしながらお前を助けるのは一苦労だ」

ドランは、低い落ち着きのある声で言った。

「うん」

と少年は頷き、首からさげている小さな笛をにぎりしめた。

少年は町へと駆けて行き、ドランはその姿を見送った。

「おじさん、何か困ったことないかい？」

酒樽を店の中に入れる男に少年は尋ねた。

「何だ坊主。俺は忙しいんだ。よそへ行きな」

と、男は突然目の前に現れた少年を冷たくあしらった。

「おやじ、持って来たぞ」

男は、店主の近くに酒樽を置いた。

「ご苦労さん。これ、代金ね」

と、店主は男に酒樽の代金を支払った。

「毎度」

「あれ？この子、あんたの子かい？」

と店主は、男の後ろに立っている少年に気がついた。男は店主の言葉に振り向き、

「お前、まだいたのか！？」

と、立たずむ少年を迷惑そうに見た。

## 第2話 怪物

「うちは、酒を飲むところだ。君にはこの店はまだ早いよ」と、店主は少年を追い払おうとした。

「ねえ、困っていることない？」

少年は気にせず、にこにこしながら尋ねた。

「お前、いい加減にしねえと、ただじゃ帰さねえーぞっ!!」  
血の気の荒い男は、今にもつかみ掛かるような勢いで怒鳴った。

「困ったことねえ…。変な噂がたつて、最近客が減ったことだね。まあ、君にそんな愚痴を言っても仕方ないんだけどねえ」

と店主は、溜め息混じりに言った。

「変な噂？」

少年は、店主の話に耳を傾けた。

「お前に話す必要なんかねえよ!さあ、とつとと帰れ!!」  
と、男は少年の腕を掴んだ。

「イヤだ!話を聞かせてくれたら帰るよ!!」

少年は男の手を振り払うために身をよじらせ、抵抗した。

「本当に帰るんだな？」

と男は、このしつこい少年に顔を近づけた。

「うん!!」

と少年は、頷いた。

「しゃーねえなあ…」

男は少年を追い払うことを一旦諦め、頭をボリボリと掻いて近くの椅子を引き寄せ座った。

「今、この町で夜になると怪物が現れるって噂がたってんだ。実際に見た奴の話では、そいつはデカイ翼を持っていて、手当たり次第の人間を喰えるだけ喰っちゃう」

「まったく、何だつてこの町を襲うんだろっねえ。こっちは、商売上がったんだよ。それどころか、自分の命まで危ないなんて」

再び店主は溜め息をついた。

「ありがとう。じゃあね！」

と少年は話を聞き終えると、あっさりと店を去った。

「ほう、人を喰う怪物か」

ドランは、少年から町の噂を聞いた。

「もしかしてっと思って思うけど…」

と、少年はドランを見た。

「私と同じドラゴンかもしれぬな」

とドランは、少年の思っていたことを口にした。

「今夜、町へ泊まってみるよ」

「そうか、わかった」

と、ドランは頷いた。



### 第3話 ナイト登場

少年は安い宿を探していた。

「泊まるって言っても、お金ないんだよねえ」

と、少年は手に握っているわずかな銅貨を見て、苦笑いした。

「はあ」

一人の少女が溜め息をつきながら歩いていた。そこへ向かい合わせに歩いて来た男とぶつかってしまった。

「痛つてえなあ」

と、ガラの悪い男は少女を睨みつけた。少女はとっさに、

「す、すみません!!」

と、頭を下げて謝った。

「この俺様にぶつかつたという、ただ謝るだけで許されるとでも思つてんのか?」

と男は、少女を突き飛ばした。

「キャッ!!」

少女は尻餅をつかされ、

「ちよつ、何すん…」

と、さすがにこの男に何か言い返してやろうかと思った。だが、その男の顔をよく見ると、町一番の荒くれ者で有名な男であった。

「何だ? そつちがぶつかつて来たくせに、俺に文句でもあんのか?」

人相の悪い顔が歪み、さらに見る者に恐怖と威圧感を与えた。

「い、いえ」

と、少女は慌てて首を大きく左右に振った。

「事によつちやあ、許してやらんでもないぞ。俺の相手をするんだつたらな」

と男はニヤリと笑い、少女の腕を掴み、連れ掠おうとした。そんな光景を見ていた少年は、少女を助けようと近づいた。

「おい、その…」

少年が男に声をかけようとした時、目の前にすらりと背の高い男が現れた。

「おい、その娘を連れてどうするつもりだ！」

「あん？何だお前」

「ナイト様！」

と、少女はその突如現れた男の名を呼んだ。

「お前、俺に盾突こうってのか？だったら、ここでひねりつぶして、見世物にしてやるよ」

と男は笑って、ナイトに殴りかかった。

ナイトは男の拳をひらりとかわし、男の腹をおもいつきり殴った。

そして、腹をおさえ、前屈みになった男の首根っこに、その長い脚でかかと落としをくらわし、とどめをさした。

男はその場に倒れ、気絶してしまった。

## 第4話 ルシアとティーナ

「わあ、すごいなあ」

と、少年はナイトの姿を尊敬の眼差しで見ている。

「大丈夫かい？ティーナ」

ナイトは、少女に声をかけた。

「はい、ありがとうございます」

ティーナは礼を言っていたが、その表情は何故か明るいものではなかった。

「ティーナ、気をつけなさい。こんな奴とは二度と関わっちゃいけないよ」

と、ナイトは優しく言った。

「はい」

「僕はこれから用事があって、君を家まで送って行ってあげることができないけど、平気かい？」

ナイトは心配そうに、少女を見つめていた。

少女は、あまりナイトと目を合わせず、伏し目がちだった。

「平気です。ご迷惑おかけしました」

とティーナが言った後、ナイトはその場から去った。

「助けてもらったのに、あんまり嬉しそうじゃないね」

と少年は、ティーナに声をかけた。

「あなたは誰？」

見知らぬ少年にティーナは尋ねた。

見た目は普通の少年。旅の格好をしている。歳は、少し下のよう感じた。

「俺の名前は、一応、ルシア」

「一応って？」

ティーナは、少年の名乗り方が気になった。

「気にしなくていいよ」

しかし、少年はにつこりと笑い、理由を聞かせてくれなかった。

「ねえ、何で君は嬉しそうじゃないの？」

「助けてもらって嬉しいわよ。嬉しいことには嬉しいんだけど……」  
と、ティーナは困った顔した。

「聞かせてよ。君の力になってあげられるかもしれないよ」

ティーナは、無邪気な笑顔を自分に向ける少年を見て、話してもいいだろうと思った。この少年に何か出来るとは期待していないが、町の者ではない彼なら、話してもいいと思ったのだ。

「あなたに言っても仕方ない事よ。私はね、町長の娘なの。最近、夜に現れる怪物に頭を悩ませていた父は、怪物を倒せる人を捜していたの。そして、ナイト様の名があがったのよ。ナイト様は、怪物退治をする専門の人なの。でも、報酬額が高くて……」

## 第5話 報酬金の代わり

「お願いです！どうか、この町を守って下さい！！」

と、ティーナの父は必死にナイトに頼み込んでいた。

「ですが、僕の指定した怪物退治の報酬額が支払えないんでしょう？  
だったら、無理ですね」

とナイトは、冷たく突き放した。

「これで精一杯なんです」

ティーナの父は大きな麻袋を差し出したが、

「困りますよ。こっちは命を懸けているんです。安請け合いはできませんよ」

と、ナイトは首を縦に振らなかった。

「あろう」

父とナイトのやりとりをドアの隙間から覗いていたティーナは、いてもたってもいられず、二人の間に入った。

「私からもお願いします。このままでは、町の人々は安心して夜を迎えることができません」

ティーナも父と一緒にあって、ナイトに訴えた。ナイトはそんなティーナを見ながら、

「町長、この娘はあなたの娘さんですか？」  
と、尋ねた。

「ええ、娘のティーナです」

「可愛い娘ですね」

と、ナイトはニヤリと笑った。ティーナは町の中の美人に数えられる一人だった。

「では、指定した金額が払えないのであれば、あなたの娘さん、ティーナを僕にください」

とナイトは、微笑した。

「な、なんですって！ティーナを！？」

と町長は、紳士的な態度のナイトからまさか、そんな言葉が飛び出してくると思わなかった。

「町を守りたいんですよ？」

ナイトはこの憎らしいセリフを善人の仮面を被った悪魔のように、につこりと笑って言った。

「ティーナ……」

と父はティーナの手を握り、

「この町のために……」

と、苦しそうに言った。

「イヤな奴。人の足元を見るなんて」

さっきまでのルシアの中でのナイトのイメージは、がらりと真逆に変わった。

「そういえばあなたは、こんなところで何をしているの？旅をしているみたいだけど……」

「今、宿を探しているんだ。でも、お金がなくて、安い宿がないかと思って」

「いくら持っているの？よかったら教えて」

## 第6話 ティーナ宅

ルシアは、今の所持金を掌に出して見せた。  
それを見たティーナは、

「え?!これじゃあ、どんなボロの宿屋でも泊まれないわよ」  
と、驚いて言った。

「え…じゃ、じゃあ、馬小屋でもいいや…」

ルシアはティーナの言葉に、肩を落とした。そんなルシアを見て、  
ティーナは哀れに思った。

「よかつたら、家に泊まる?一晩なら平気なはずよ」

とティーナが言った瞬間、パアッと、ルシアの顔が明るくなった。

「ホント!?!」

「ええ」

と、ティーナは笑って頷いた。

ルシアは、ティーナの家の夕食をガツガツと食べていた。その光  
景を啞然として、ティーナとティーナの父、メイドは見ていた。

「おかわり!!」

と、ルシアは皿をメイドに差し出した。

メイドは呆気にとられていて、ルシアの皿をすぐに受け取る事が出  
来なかった。

「…ダメ…かなあ…?」

ルシアは、ティーナと父の顔色をうかがった。父は笑い出し、

「君、おかわりを」

と、メイドに言った。

「はい」

メイドはすぐに皿を受け取り、慌てて調理場へと向かった。

「もう、おかわり11杯目よ。まだ入るの?」

と、ティーナは目を丸くしながら、ルシアのきゃしゃな体を見て言

った。

「うん」

とルシアは、笑顔で答えた。

夕食が終わると、ルシアのために用意された部屋にルシアは入った。ルシアは窓を開けた。少し冷たい夜風が、ルシアの頬を撫で、焦げ茶色の髪を揺らした。

『お前の名前は、ルシアだ』

ルシアの記憶の中の男は、優しくルシアの頭を撫でた。

『ルシア…ル…シア…』

男は血まみれになりながら、苦しそうにルシアの名前を呼んでいた。その男の目の前には、返り血を浴びた10歳のルシアが立っていた。その手には血のついた短刀を握り締め。

『ルシア…』

「ルシア」

ルシアは呼ばれ、

「はっ」

とし、後ろを振り向いた。開いたドアに、ティーナが立っていた。



## 第7話 罪

「ティーナ、どうしたの？」

「ルシアと話しがしたいと思って。駄目かな？」

「いいよ」

とルシアが返事をする、

「よかった」

と、ティーナはにこつと笑ってベットに腰掛けた。

「ルシアって歳いくつ？」

「多分：15くらいかな？はつきりはわからないんだ」

「ええ！？15？もつと下かと思った」

ティーナは、ルシアの無邪気な笑顔と素直な言動から、もつと歳下だと思っていた。

「そう言われれば15に見えなくないわね」

「ティーナ、何か酷くない？」

と、ルシアは仏頂面になった。

「ごめん」

とティーナは笑って謝った。

「私は17よ。ルシアより2つ上ね」

「ルシアは、旅をしているんでしょ？何でこの町に来たの？」

ティーナは、次の質問をした。

「別に何処へ行くっていう当てはないんだ。たまたま通りかかった町に来て、困った人達を助けるんだよ」

「何でそんな事をするの？」

ルシアはティーナに背を向け、開けていた窓から夜空を見上げた。昼の明るさを失った空には、闇に捕えられた光達が、必死に輝き続けていた。

「罪の償い」

とルシアは一言、呟くように言った。

「罪の…償い？」

「人を…殺したんだ。たくさんの人を。そして、名前がない俺に名前をつけて育ててくれた人を、一番大切な人を殺したんだ。この手で…。俺には、名前を持つ資格なんてなかったんだ」

と、ルシアは淋しく微笑した。

そこには、昼間の無邪気な笑顔を見せるルシアはいなかった。代わりに、悲しい影を背負った大人びた少年が立たずんでいた。

ティーナはこの時、ルシアのあの言葉の意味がわかった。

「だから、名前を名乗る時に一応って言ったのね。ごめんなさい、私、悪いこと聞いちゃったのね」

とティーナは、俯いた。

「ねえ、ティーナ」

と、ルシアは明るい声で声をかけた。ティーナは、顔を上げた。

「俺がティーナを助けてあげる」

「え？」

ルシアの突然の言葉にティーナは、きょとんとしていた。

「俺が怪物を倒せば、ナイトの処に行かなくてすむだろ？」

「そうだけど…」

## 第8話 怪物退治

ティーナは、ルシアがまさか怪物を倒せるとは思わなかった。

彼女よりも少し背の低く、小柄な少年に何が出来たのだろう？

「困っている人達を助けるのが、俺の罪の償い方なんだ。ただのエゴって言われればそれまでだけどね」

ルシアはまだ影を背負っていた。彼は、一体どんな思いをして生きてきたのだろう？

ティーナは、自分よりも強い少年を見つめた。

「大丈夫、俺に任せて」

と、ルシアはにっこりと笑った。

ティーナは、難題をこんなにも簡単であるかのように言ってしまうルシアを見て、信じようと思った。

信じてあげたかったかったのだ。自分も彼の救いになればと。

「お願い、怪我しないでね」

と、ティーナは微笑んだ。

「キヤーツ！！」

突如、外から悲鳴が上がった。

「きつと、怪物だわ！！」

と、ティーナの顔が青ざめた。

「出たな怪物！！」

とルシアは叫ぶと、窓に足をかけ、2階から飛び降りた。

「ルシア！」

ティーナは驚いて窓に駆け寄り、下を見下ろした。すでにルシアの姿は、闇に消えていた。

ルシアが悲鳴の聞こえた方へと駆けて行くと、先にやって来ていたナイトの姿があった。

ルシアは腰に付けている小さな袋から小瓶を出し、

「ナイトさん、ナイトさん」

と、呼んだ。

「何だ？」

とナイトが振り向くと、ルシアは小瓶の蓋を取り、中に入っている粉のにおいを嗅がせた。甘ったるい薫が、ナイトを包み込んだ。

「な、何だこれ…は…」

まぶたは重くなり、体の全身の力は抜け、その場に崩れ落ちた。ナイトはすっかり眠りこけてしまった。

「さあ、邪魔者は消えた」と

とルシアは満足そうに、小瓶をしまった。

「アーハッハッハ…!! さあ、もっと喰らうがいい」

悲鳴が聞こえた方には、黒いドラゴンが暴れていた。その背に男が立って、笑っていた。

「やめろっ…!!」

とルシアは、黒いドラゴンの前に立ちはだかった。

## 第9話 呪われた色

「邪魔をする気か？どうやら喰われないようだな。ならば望みどうりにしてやろう！」

黒いドラゴンはルシアに向かって大きな口を開け、襲いかかって来た。それをルシアは、ひらりとかわした。

「身軽な奴だ。だが、次はそうはいかんぞ」

再び黒いドラゴンはルシアに襲いかかってきた。

「ルシア！！」

そこへ、ルシアが心配になって駆けつけたティーナが現れた。

「ティーナ？！」

ルシアが驚いてティーナを見た瞬間、黒いドラゴンは標的を変え、ティーナに襲いかかった。

「キャーッ！！」

「ティーナ！！」

ルシアはすぐさまティーナを庇って、目の前に出た。そして、首から提げている笛を吹いた。

「ん！？」

男が空を見上げると、紅いドラゴンが向かって来るのが見えた。

ドランは男と黒いドラゴンに向かって、炎を吹き出した。黒いドラゴンは、さつと炎をかわした。

「ルシア、大丈夫か？」

と、ドランはルシアのもとへと降りた。

「うん、平気」

と、ルシアは頷いた。

「ルシア…あなたって一体…」

ティーナはドランを見上げ、驚いていた。

「ほう、伝説の罪深き紅いドラゴンか」

男は笑いながら、ドランを眺めた。

「人を喰らい、契約を破ったその罪で、白いドラゴンから人間の血の色に染まった…」

「おい！！」

ルシアは呼ばれ、後ろを振り向いた。そこには、眠らせたはずのナイトが立っていた。

「よくも邪魔を！」

「来ちゃダメだ！！」

ルシアはとっさに叫んだが、目の前でナイトはぱくりと黒いドラゴンの口の中に入ってしまった。

「愚かな人間だ」

と、男は哀れんでいたが、口元にはうつすらと笑みを零していた。

「よくもっ！」

とルシアは、男を睨みつけた。その瞳は、紅く染まっていた。

それを見た男の顔は、険しくなった。

「お前はもしかして、呪われし子供」

ルシアは腰につけていた短刀を取り出すと、黒いドラゴン目掛けて飛びかかった。

## 第10話 また何時か

黒いドラゴンの頭部に、ルシアの短刀が突き刺さり、黒いドラゴンは悲鳴を上げた。

短刀をすぐさま抜いたルシアは、黒いドラゴンの返り血で紅く染まっていた。そこには、昼間のルシアとも、あの影を背負った少年とも違っていた。

ルシアは不気味に笑うと、ぺろつと舌なめずりをした。その様子を見た男は愉快そうに、

「やはり、お前は呪われし子供！まだ生き残りがいたのか」と、言った。

「これはおもしろい組合せだ」

黒いドラゴンは血を流しながら、ルシアに向かって唸り、襲いかかって来た。すると、ドランは黒いドラゴンに炎を吹いた。

怒りでルシアしか見えていなかった黒いドラゴンは、たちまち炎に包まれた。男はその前に、黒いドラゴンから飛び降りた。

「呪われし子供よ、また何処で会おう！」

男はそう言つと、闇に包まれ、消えてしまった。

ティーナはルシアの話が本当だったという事を確信していたが、彼に声をかけた。

「ルシア…？」

ティーナは、心配そうにルシアの顔を覗き込んだ。ルシアの瞳はまだ、紅いままだった。

「血…殺す…殺す…」

と、ルシアは唱えるように呟いていた。ドランは、そつと片方の翼でルシアを覆うように包み込んだ。

「ルシア、もう、終わったのだ。血で自分を汚すのではない」

ドランは静かに、優しく言った。ドランが翼をどけると、そこから現れたルシアの瞳は、もとの色に戻っていた。

「ごめん、ティーナ。俺の事怖かっただろ？」

ルシアの瞳は悲しそうだった。

「うっん」

と、ティーナは笑顔で首を横に振った。正直、ティーナは恐ろしいと思ったが、もとに戻り、人を恐れているルシアを見て、そんなものは消し去ってしまったていた。

「この町が助かったわ。ありがとう」

「俺の事、怖くないの？」

ルシアは少し驚いたように、再び尋ねた。

「私は、ルシアの事好きよ。だから、どんなルシアを見たって怖くないわ」

「人にいつも嫌われてたから、何かちょっとビックリしちゃった」とルシアは言った後、

「ティーナ、ありがとう」

と、いつもの笑顔を向けた。

「あの悪いドラゴンは倒せたけど、ナイトさんは可哀相だったわね」と、ティーナは残念そうに言った。

「大丈夫、ナイトさんは食べられて時間が経ってないから、出てこられるよ」

燃える黒いドラゴンの体は徐々に霧のように消えていき、少し経つと、ナイトの体が現れた。

翌日、ナイトはティーナの家で看護されたが、当然ティーナを貰う事はできなかった。

「もう、行くの？」

ティーナは、旅に向かうルシアに言った。

「うん、困った人はいっぱいいるから」

と、ルシアはにっこりと笑った。

「この町にまた来たら、家へ来てね。その時は、もっと料理を用意しておくから。いつでも待ってるよ」



「  
ありがとう」

そして、ルシアとドランは次の場所へと向かった。

## 第11話 始まりの場所

「ドラゴン、契約だ」

一人の男は、契約を交わした。

「よかるう」

白いドラゴンは、契約を承諾した。  
契約ー。

人間とドラゴンは、共存の道を選んだ。だが、長くは続かなかった。

「ここは…嫌な処だ」

ドランはそう言っ、街の近くの岩場に降りた。ルシアはいつもと同じように、ドランの背から降りた。

「いつもより、不機嫌だね」

と、ルシアはドランの顔を見た。

「ここは、全てが始まった場所なのだ…」

「ドラン？」

この時、ルシアはドランの言っている意味がわからなかった。

「さあ、さっさと行ってこい」

と、ドランはルシアを促した。

「うん、じゃあ、行ってくるね！」

街は賑やかで、不思議な恰好をしている者が多くいた。

尖んがり帽子や先が上に向かってカーブを描いている靴、黒一色の人がいるかと思えば色とりどりの派手な服を身に纏った人もいる。

また、ホウキやステッキを持っている人もいた。そんな人々が行き交う通りの店では、水晶やドクロ、大きな釜、妖しい薬など他の場所では売っていないような珍しい物が並んでいた。

「ねえ、困った事はないかい？」

ルシアは、黒い布を頭から被った男とも女とも見分けがつかない者に尋ねた。その者は、通りでテーブルに水晶玉を置き、ただ椅子に腰掛けていた。

「あんたが来る事はわかっていたよ」

声からして、年の取った女のようにだった。

「困った事は、あんたに道を示すか否かという事。どうしたもんかねえ」

「道を示す？何でそんな事を迷うの？」

「お前さんにとって悲しく辛く、お前さんの相棒にとっても同じだからさ。だけど、いつかはお前さんは知る。今よりも、いつかの方が苦しいかもしれない。だが、私が道を示していいものか」

「あなたは…未来がわかるの？」

ルシアは真剣な表情で老婆を見つめた。

## 第12話 示すモノ

「見えるさ。だけど見えると言っても、お前さんが私に話しかけて来る事やほんのわずか先の未来だけさ」

「この水晶で見えるの？」

と、ルシアはテーブルの上に乗った水晶玉覗いた。

「これはお飾りみたいなもんさ。たいしたものは見えないよ」

と、老婆は笑った。

「…俺には見えるよ。この中に俺が殺した人達の顔が見える」

ルシアがそう言っただけで水晶を覗き見ているので、老婆も覗き込んだ。

すると、水晶玉は血のように真っ赤な煙で曇り、その中には白い顔の人間達の顔が次から次へと浮かび上がっていく。

どの顔も苦痛に満ちていた。それはまるで、地獄を覗いたかのような光景だった。

「お前…」

と老婆は驚いて顔を上げ、ルシアを見た。

「いつも俺の中には、この人達の悲鳴が聞こえてくる。その悲鳴は、頭の中に広がって、耳を塞いでもずっと聞こえるんだ。悲しくて、辛くて、これ以上苦しい事なんてないよ」

ルシアは表情を変えず、水晶玉を見続けていた。

「だから、教えて。俺がいつかは知る事。いつか知って事は、大切な事で、必ず聞かなきゃいけない事でしょう？ だったら聞くよ。あなたの悩みがこれで消えるでしょ？」

ルシアは水晶玉から眼を離し、老婆に微笑んだ。

「お前さんがそう言うのであれば道を示そう。あの大きな白い建物が見えるじやろう？」

と、老婆は通りの先に見える建物を指差した。

「あの建物へお行き。そうすればわかるよ」

「うわぁ」

初めて来る場所に声を漏らした。ルシアは老婆に言われた建物に來ていた。

周りには、天井に届くかと思うぐらいの高い本棚がいくつも置いてあった。本の数なんて数え切れない量だ。

一冊、近くの本を手を取った。何ページかめくると、ある挿絵で手が止まった。

「これ、ドランに似ている……」

その挿絵は、一匹の紅いドラゴンが描かれていた。

「君、そこで何しているの？」

ルシアは声をかけられ、後ろを振り向いた。

### 第13話 真実は物語の中に

そこには、一人の青年が立っていた。歳は18、19くらいだ。

「本を見ているんだ。でも…字が読めない」

と、ルシアは淋しく笑った。

「貸して、僕が読んであげるよ」

と青年はルシアに近付き、手を差し出した。ルシアは黙って本を渡した。

青年は本を受け取ると、石で出来た床に腰を降ろし、側の本棚に寄り掛かった。

ルシアも青年の隣に座った。

『昔々、ドラゴンと人間は争っていました。ドラゴンは人間を食べると、強力な力を得る事ができました。人間はドラゴンの血を飲むと、永遠の命を得る事ができました。』

一人の青年が争いを止めようと、立ち上がりました。平和を願う人々は、その青年に願いを託しました。

青年は、危険を承知ながらもドラゴンの住化に向かいました。

そして、ドラゴン達の長に会いました。そのドラゴンは、雪のように真っ白でした。

ドラゴンは言いました。

”命知らずの人間が来たな”

青年はドラゴンを見上げて、大きな声で言いました。

”ドラゴンの長よ！こんな無意味な争いはもう、終わりにしないか！！”

”この長きに渡る戦い、今さら平和を願うのか？”と、ドラゴンは鼻で笑って言いました。

”今だからだ。私達は愚かな生き物だ。長い月日を経て、やっとこ

の争いの無意味な事を悟ったのだ。あなた方のような賢い種族なら  
おわかりであろう？ 私達を許してくれとまでは言わない。ただ、お  
互いを傷ける事を止めたいのだ”

青年の言葉を聞いて、ドラゴンは大笑いしました。

”口の上手い奴だ。私共に怯む事なくここまで来た事、お前の口の  
上手さに、その話を受けてやろう！”

こうして、人間とドラゴンとの争いは終わりました。

しかし、それには条件があったのです。その条件とは、互いに契約  
を結ぶ事。

## 第14話 呪われし者達

### 契約

もしも、人間がドラゴンを殺した場合、その身が果てようと、永久にこの地に囚われる。もしも、ドラゴンが人間を殺した場合、その身は人間の血の色に染まり、その色が消えぬまで、永遠に苦しみ続ける

でも、平和を良く思わない人間がいました。

男は強欲な人間で、ドラゴンの血を売りさばき、お金に代えていました。

そんな彼は、契約の事を知らない他の町の人々を唆し、ドラゴンを殺しに行きました。

平和がしばらく続き、それに慣れていたドラゴン達は、大勢の人間達の襲来に驚きました。不意を突かれドラゴン達は、次から次へと殺されていきました。

男はその光景を愉快そうに見ていました。

人間達の襲来に怒り狂ったドラゴンの長は、人間を喰い殺しました。そんな事実を知った契約を交わした青年は、悲しみに陥りました。

そんな青年のもとへ、ドラゴンの長と同じように人間を喰らったドラゴンがやって来ました。

そして、青年が契約を交わした後に結婚した妻と子供達を三人喰らいました。青年はそのドラゴンを殺しました。

その時の青年の心は、怒りも悲しみも過ぎ去り、何も感じる事ができませんでした。そこへ助けを求めてやって来たのが、強欲な男でした。



青年はその強欲な男の心臓に剣を突き刺しました。

強欲な男は死ぬ間際に言いました。

” お前がこんな契約を結んだのが悪いのだ！平和など手に入れりやしないんだ。お前の子供と平和を願った奴らの子供に呪いをかけてやる！！人間の血を求め、苦しむ呪いを。あのドラゴンと同じさ。ハッハッハッ……。”

青年は、慌てて家の中を見ました。

すると、四番目のまだ赤ん坊だった子供が布に包まれ、洋服棚の中に隠されていました。

青年は子供の呪いから先を案じて殺そうとしましたが、殺す事はありませんでした。青年は、その子供を抱き抱え、その地を去りました。

## 第15話 真実を知った今

その後、青年と子供がどうなったのかは誰も知りません。ただ、あのドラゴンの長の苦しくも悲しそうでもある鳴き声は、何処からか聞こえてくるそうです…』

青年は読み終わり、本を閉じた。そして、隣にいるルシアにそつと手渡した。

「この話…」

ルシアはじつと本を見つめた。青年は立ち上がり、建物の入口へと向かった。

ルシアは

「はっ」として顔を上げ、

「待って！君の名前は？」

と、青年を引き止めた。何故かはわからないが、行ってほしくなかった。

青年は振り向き、

「アル」

と言つて、微笑んだ。その瞬間、強い風が吹き、一瞬にして青年の姿は消えた。

「どうしたルシア？」

うずくまって眠っていたドランは顔を上げ、やって来たルシアを見た。

「ドラン、俺、ある物語りを讀んだんだ」

ドランは、ルシアがいつもと違う様子に気がついた。

「ドラゴンと人間は争つてたけど、契約をした事で争いが終わったんだ。でも、人間の悪い奴が契約を破っちゃうんだよ。それで、怒

ったドラゴンは人間を喰い殺して苦しむ。契約を結んだ人も、家族を殺したドラゴンと悪い奴を殺すんだ。だけど、悪い奴は呪いがかかるんだよ」

と、ルシアは物語りの内容を話した。

「ねえ、ドラン。その呪い、どういう呪いかわかる？」

と、ルシアは笑った。その笑顔は、悲しいものだっただ。

黙って聞いていたドランだが、ゆっくりと重たい口を開いた。

「…知っている。その呪いは、お前にかけられている呪いだ」

「ドランは昔、ドラゴンの長だったんでしょ？」

とルシアが尋ねると、

「そうだ」

と、いつもの落ち着いた声で答えた。

「お前にきちんと話すべきだったな」

「街の…子供達はどうしたの？」

「血を求め、殺戮を繰り返した。だから子供らの親は、自らの手で、自分の子供を殺した。そう…お前が今日来たこの街は、一度は滅びかけたのだ」

と、ドランは街の方を見つめながら言った。

「俺は…何で生きてるの？」

と、ルシアは俯いて言った。

## 第16話 ドランの悲愴

「お前の親は、手を下せなかったのだ。だから、お前は今、生きて  
いる」

「こんなに苦しいのなら、殺してほしかった…」  
とルシアは、震えた声で言った。

「お前の父親も苦しいだろう。肉体が滅びようとも、この地に永久  
に囚われているのだから…」

というドランの言葉にルシアは驚いて、顔を上げた。

「お前の父親は、私と契約を交わした男だ」

ルシアはこの時初めて、顔も名も知らない父の事を知った。

「お前の父親、”アル”は殺されたのだ。契約を結んでの結末に家  
族を喰い殺された人間の手に…」

「…アル。ドラン！俺、アルっていう人に本を読んでもらったんだ  
！…でも、偶然、名前が同じだっただけかな？」

（偶然。そんな偶然、あるわけなからう。あいつはこの地に囚われ  
ているのだ。苦痛と共に…）

ドランはルシアが会った青年がルシアの父、アルだと核心していた  
が、口には出さなかった。

「ルシア、どんなに苦しくても、私も同じに苦しい。お前一人だけ  
じゃないよ。殺してほしかったなんて言わないでくれ。私は、あの  
日から、お前と共に生きようと決めたのだから」

と、ドランは優しく言った。

「ごめん、ドラン」

と、ルシアはドランの瞳を見つめて言った。その瞳は、悲しそうだ  
った。

「街に戻るね」

ルシアが再び街へと向かって行く姿をドランは見送った。

（憐れなルシアよ、お前はどれだけ苦しみを背負えばいいのか。お

前の父を殺したのは、お前に名をつけ、お前を育てた男なのだ。そう、お前が殺したあの男。私は、運命など信じぬ。これ以上、お前が苦しむ運命など！私はお前の苦しみの分まで背負おう。それが、私の罪の償いなのだ！）

悲しき記憶は、今でもドラムの中では過去ではない！。

「ねえ、困った事ないかい？」

とルシアは街の人々に尋ねるが、人々は変な顔をして通り過ぎるばかりであった。

## 第17話 新たな出会い

「ねえ、困った事ないかい？」

やつと尋ねたルシアに答えてくれる者がやって来たが、

「バカだね、あんた。この街は今や、世界でも名の知れた魔法使いが住む街だよ。困っている事なんてあるはずがないだろ。あったとしても、自分達で解決できるさ」

と女は鼻でせせら笑うと、去って行った。

「何か、この街に来た意味がないかも。でも…ドランや父さんの事が少しわかったわけだし、来て良かったのかなあ」

ルシアが独り言を言っただけで歩いていると、後ろから声をかけられた。

「あの、あなた、街の人達に困っている事はないか尋ねているそうね」

と、40代くらいの女は言った。

「そうだよ」

と、ルシアは頷いた。

「何でそんな事を？仕事を探しているの？」

「違うよ。ただ、困っている人の役に立ちたいだけ。それだけだよ」とルシアは、にっこりと笑って答えた。

「それなら、私達の頼みを聞いてちょうだい。私の息子の友達になつてほしいの」

「いいよ」

ルシアはすぐに返事をし、女はその返事に嬉しそうだった。

ルシアは女の家に案内された。そして、地下室へと連れられた。

「この子なの」

薄暗い部屋の中に大きな檻が置いてあった。その中に、何かがつくめいていた。

ルシアは恐る恐るゆっくりとその檻に近付いて行った。

「ニンゲン？」

檻から声がしたかと思うと、紅い眼が二つルシアを捕え、飛び掛かるように檻の柵を掴んだ。ルシアは驚いて、後ずさった。

檻の柵の間から鼻がつきでて、くんくんとにおいを嗅いだ。

「オマエ、オナジニオイガスル」

檻の中をよよく見ると、その中に入っていたのは、ルシアと同じ歳くらいの少年だった。

「この子、他の子とは違って少し気性が荒いけど、本当はとてもいい子なのよ。檻の外から話すだけでいいから、友達になってやってちょうだい」

と、女はルシアに断られるんじゃないかと、ビクビクしながら言った。

## 第18話 檻の中の少年、ガイロ

「うん」

と、ルシアは笑顔で頷いた。それを見て女がホッとした表情を見せた時、女と同じ歳くらいの男がやって来た。

「あなた、この子に友達ができたのよ！」

と女は、男に嬉しそうに話した。

「そうか、良かったな」

と、女の夫らしい男はにっこりと笑った。

「君かい？友達っていうのは」

と男は、ルシアを見た。

「よろしく」

男は笑顔でそう言つと、上の階へと上がって行つた。

「そういえば、あなたの名前、聞いていなかったわね」

「俺の名前は一応、ルシア」

「そう、ルシアね。ルシア、1つだけ守ってほしい事があるの。この地下室に私達の息子がいる事を内緒にしてほしいの。守れるかしら？」

女の言葉を不思議に思つたルシアは、

「何で内緒にしないやいけないの？」

と、尋ねた。その質問に女は答えにくそうだった。

「私達…怪物を飼っているって噂されてるの。この子、人を殺した事があるの。何人も。その時家に逃げ帰って来るこの子を見た人がいて、この噂が広まったのよ。でも、この子は怪物じゃない！！私達の息子よ！！」

女はそう言つて叫ぶとうずくまり、泣き出してしまった。

ルシアはそつと女に近寄り、肩に手をかけた。

「この子の名前を教えて」

とルシアに言われ、女は顔を上げ、



「ガイロよ」

と、答えた。

「俺は、ルシア。よろしく、ガイロ」

「ル…シ…ア…？」

「今日から友達だよ」

「トモ…ダ…チ…？」

「ありがとう…ルシア」

と、女は涙を流したまま、ルシアに向かって微笑んだ。

地下室からルシアが上がって行くと、男が椅子に座って紅茶を飲んでいた。

ルシアが何も言わずに出て行こうとすると、男はルシアの背に向かって言った。

「あの子は、化け物だ。信じたくもないし、認めたくもないが、確かな現実なんだ」

ルシアは振り向き、男を見た。

## 第19話 同じ

「昔、この街の子供達は呪いをかけられた。人間の血を欲し、求めるという呪いをね。その時皆、我が子を殺した。でも、私達にはできなかった。やっと…やっと生まれた子だったんだ。でもあの子は…」

と男が言いかけると、ルシアは、

「化け物なんかじゃない！」

と、叫んだ。

男は驚き、声を失った。

「人を殺したくないのに、体の血が自分と同じ人の血を追い求める。とつても、苦しいんだ。苦しくて、それから逃れたくても逃れられない…」

「君は…」

と男がいいかけた時、女が地下室から上がって来た。

「どうしたの？大きな声が聞こえたけど…」

「俺、もう行くね！明日、またガイロに会いに来るよ！！」  
そう言つてルシアは外に出た。

次の日、ルシアは約束通り、ガイロのもとへと向かった。

「ガイロ、君はお父さん、お母さんが好きかい？」

とルシアは何気なく尋ねたが、暗い檻の中からは返事が返ってこなかった。

「ガイロは、この檻の中にいるの嫌じゃない？」

「……」

ガイロからの返答はまた沈黙かと思っていると、奥の方から一言、  
呟きのような声が聞こえた。

「…イヤ…ダ…」

ルシアは、その声をしっかりと聞きとめた。

「ガイロ、こつそりここから抜け出しちゃおうか!!」

とルシアは言くと、檻から少し離れた所に、壁にかけてあった鍵を手を取った。そして、ガイロを檻から出した。ルシアは初めて、ガイロの姿をはつきりと見た。自分と同じくらいの背で、瞳が紅く染まっている事以外、他の人間の少年と何ら変わりなかった。

「そのままじゃ、バレて怒られちゃうから」

とルシアは言い、側にあつたボロ布をガイロに頭から被せ、身に纏わせた。

「これでよし!じゃあ、外に行こう!」

ルシアはガイロの手を取り、ガイロの母が奥の部屋を掃除しているのを見計らつて、外に出た。

ガイロは、空に高く昇った太陽を見上げて目を細めた。

「ガイロ、いろんな処歩こう」

## 第20話 外の世界

ルシアはガイロの手を引いたまま、街の中の人込みの中へと入って行った。

ガイロは急に鼻をひくひくとさせ、走って行った。

「ガイロ？」

ルシアは走って行くガイロを追い掛けた。

ガイロは香ばしい肉の薫が漂う出店の前で、止まった。

こねた肉が棒についている物を網が掛かった炭火の上で店の男が焼いていた。それをガイロはじっと見つめていた。

ルシアはポケットから小銭を出し、確認した。わずかであるが、一っだけ買えるぐらいの金があった。

「おじさん、一つおくれ」

と、ルシアは金を店の男に差し出した。

「はいよ。毎度」

と店の男は金を受け取り、肉の棒を渡した。ルシアは受け取ると、ガイロに差し出した。

ガイロは一口噛った。肉汁がぼたぼたと滴り落ちた。

ガイロがガツガツと食べ始めると、ルシアはその様子をじっと見ていた。すると、腹の虫が鳴り出した。

「グウー、ギュルルル…」

ガイロは食べるのをやめ、ルシアの腹を見た。

「えへへ…」

とルシアは少し照れながら、頭をかいた。

ガイロは食べかけの肉の棒をじっと見ると、黙ってルシアに差し出した。

「いいよ。ガイロ」

とルシアは首を横に振ったが、ガイロは肉の棒を突き付けた。

「ありがとう」

とルシアは言つて、肉の棒を受け取り、残りを食べた。

それから二人は再び歩き出し、街の中を眺めつつ街の外へと出た。ルシアがやって来た方向とは逆の街の出入口には、すぐ近くに小さな丘があった。

「行こう」

ルシア達は、丘を駆け登った。

丘から下を見下ろすと、すぐそこには花が咲き乱れる野原が広がり、小川が流れていた。

「わあ、綺麗な処だなあ」

ルシアは野原に駆け込んだ。

ガイロはその様子を立って見ていたが、ルシアが振り向き、ガイロを呼んだ。

「ガイロ！来なよ！！」

ガイロは小走りに、ルシアのもとへと駆け寄った。

「川に魚がいるかな？見てみよう」

## 第21話 ドランとアル

川を覗きに行くと、小さな川魚が陽の光できらきらと体を光らせながら泳いでいた。

ガイロはそつと川の中に手を入れ、驚いたようにすぐに手を引つ込めた。

「冷タイ」

「そうだよ。水は冷たいんだよ」

と、ルシアはガイロを見て笑った。

「ガイロ、この花のおいを嗅いでごらん」

ガイロはルシアの横に来て、鼻をひくひくさせながら、においを嗅いだ。

「不思議ナ…ニオイ。甘クテ、懐カシイニオイ」

「もうすぐ日が陰るね」

と、ルシアは空を見上げた。

いつの間にか、太陽は少しずつ沈み始めていた。

「もうそろそろ帰ろう」

とルシアは、ガイロを見た。ガイロは黙って頷いた。

家にこつそりと入り、ガイロを檻の中に入れ、鍵をかけた。

「ガイロ、また一緒に遊ぼう」

とルシアは笑って言うのと、地下室を後にした。

「ルシア…」

ガイロは、誰もいない薄暗い部屋の中で呟いた。

夜になり、ルシアは馬小屋に忍び込んでそこで一夜を過ごした。

「ドラン…」

眠っていたドランは名を呼ばれ、顔を上げた。

月の光で岩は鋭く、ごつごつとした肌をあらわにしていた。

岩の影が長く伸びた先に何かが動いていた。ドランは目を細め、じつと見つめた。そこから、男がドランのもとへと近づいて来た。

「アル」

「ドラン、久しぶりだね」

と、アルはにつこりと笑った。

「契約を結んだ時の姿なのだな」

ドランは、死んだ時の年齢よりも若いアルを見て言った。

「姿は、見る者によってさ。もう、僕に肉体はないよ」

「すまない。私のせいでお前は…」

「ドラン、君のせいじゃない。何かを得れば、それだけ失う代償もつくのさ」

「だが、その代償はあまりに大きい。お前を私は苦しめてしまった」とドランが言うと、

「ドラン、自分を責めないでくれ」

と、アルは優しく言った。

「君が僕のために苦しんでいると、僕にとってそれが一番苦しいんだ」

「アル…」

## 第22話 交錯し始めた糸

「ドラン、僕は君に感謝しているんだ」

「感謝？私は何も…」

「息子を…ルシアの命を助けてくれてありがとう。そして、育ててくれて」

と、アルは微笑した。

「あれは罪の意識からだ。私のエゴさ。感謝される程のものではない」

「ドラン、エゴだけで自分の命を捧げる事なんてできないさ。それに、ルシアだって君を慕うはずがないだろう？」

とアルは、諭すように言った。

「僕達の苦しみは、意味がないものではないと思うんだ。この苦しみは、二度と同じ事を、同じ時代を繰り返してはいけないという意味なんだと思う。だから、その苦しみを知っている君とルシアは伝えるためにいるんだ。そして、僕も…」

「この世界の救世主になれとでも？人間を救えというのか。この私に。人間のために」

と、ドランは鼻で笑った。

「人間のためじゃない。全ての生き物のためにさ」

「それが…私にかせられた使命、罰なのか…」

朝になり、ルシアはガイロの家へと人込みの中を抜けていた。

その人込みの中に、見覚えのある顔があった。それは、前の村で黒いドラゴンを連れていた男だった。

ルシアはその男を追い掛けたが、すぐに見失ってしまった。この時、ルシアに不穏な風が吹いた。

「この街は相変わらず変わっていない。自分達の力に自惚れ、暢



氣にのうのうと暮らしている。まったく、来るのも嫌になる場所だ」と、黒いドラゴンを連れていた男は不機嫌そうな顔をして、独り言を言っていた。

「だが…それも今のうちだ。もうすぐこの街は、血と悲鳴でいっぱいになる。こんな故郷など、さっさと潰してやる」

男は不気味に笑いながら、人込みの中へと消えて行った。

「ルシア、少しお茶を飲んでいかない？」

ガイロの母は、帰ろうとするルシアを引き止めた。

「うん」

ルシアは素直に椅子に座った。

## 第23話 闇夜に紛れて

「ありがとうね、ルシア」

と、母は甘酸っぱいレモンの香りがする紅茶をルシアに出した。

「あの子、あなたと会うようになってから、少しずつだけど、喋るようになったの。それに、何だか落ち着いてきたみたいで、昔のように突然暴れなくなったのよ」

「俺も、ガイロと友達になれて良かったよ」  
と、ルシアは笑った。

「キヤーツ!!」

静かな夜の街は、一つの悲鳴で掻き乱された。ルシアは馬小屋から跳び起き、外に出た。

「ハハハハ…さあ、もつと喰らえ!!」

月明かりに照らされて、黒いドラゴンに乗っている男が見えた。

「お前は! やめろっ!!」

ルシアが叫ぶと、男はルシアに気付いた。

「おお! お前は呪われし子供!! 再び会ったな」  
と、男は嬉しそうに笑った。

「何でこんな事を!」

「何で? その問いに答えよう! ドラゴンは人間を喰らう事で、強力な力を得る。そして、そのドラゴンを私は食し、さらに強力な力を得るのだ!! その力で私は、この世界を統治するのだよ」

と、男は愉快そうに話した。

「そんなのいけない事だよ! ダメだ!! そんな事しちゃっ!!」

「お前が私を邪魔をする気なのであれば、容赦はせんぞ!!」

黒いドラゴンは、青い炎を吹いた。ルシアはとっさに避けた。

避けた場所の地面は、たちまち凍りついてしまった。

「ドランを…」

ルシアが笛を握った瞬間、

「そうはせん！」

と男は言い、ドラゴンは翼で大きな風を巻き起こし、ルシアを吹き飛ばした。

「うわあっ」

吹き飛ばされたルシアは、地面におもいつきりたたきつけられた。その隙を見て、ドラゴンは前足でルシアの体を地面に押し付けた。

「うっ」

めりめりとルシアの体が押し潰され、地面へと沈み込んでいく。

（助けて…誰か…）

「何だお前は！」

男の目の前に布を頭から被り、顔を隠した者が現れた。

その者は大きなナイフ型の剣で、ルシアを押し潰しているドラゴンの足を切り付けた。

## 第24話 トモダチだから

「ギヤアーツ」

ドラゴンが悲鳴を上げ、足をルシアから離れた。

ルシアは痛む体をかばいながら起き上がり、自分の横に立っている者を見上げた。

布の中から、紅い瞳が覗いていた。

「ガイロ……？」

「ルシア……大丈夫か？」

「どうしてここへ？ 抜け出して来たの？ 何で？」

「血ノニオイガシタ。ダカラココ来タ。ルシア、友達。友達、傷ツケタクナイ」

と、たどたどしい口調でガイロはルシアの質問に答えた。

「邪魔者がまた増えたか」

と男は言い、

「やれ」

と、ドラゴンに命令した。ドラゴンは口から青い炎を吹き出す。

「ガイロっ！ 逃げて……！」

体が上手く動かせないルシアは咄嗟に叫んだ。だがガイロはルシアに向かって微笑むと、青い炎に体を向け、手を広げた。

「ガイロ……！」

青い炎はガイロを包み込んだ。ガイロの体はたちまち氷漬けにされてしまった。

「馬鹿な奴だ」

と、男は笑った。

「せめてもの慰めだ。私がとどめをさしてやるっ」

男はそう言つと、人差し指を頭上に掲げ、空中で円を描いた。

空が曇り、黒い雲から雷の唸る音が聞こえてきた。男は掲げていた手を目の前に振り下ろした。すると、一筋の稲妻が氷漬けにされて

いるガイロの頭上に落ちた。

ガイロの体はルシアの目の前で、粉々に砕けた。

「ガイローっ！！」

ルシアは涙を流しながら、叫んだ。

「次はお前だ」

「よくもっ！」

ルシアの瞳は紅く染まり、男を睨みつけた。

ドラゴンは青い炎をルシアに向かって吹き付けた。ルシアはその炎を避け、腰につけていた短刀で男の首元を切り付けようとした。

だが男は避け、ルシアの顔面を手で押さえ付けた。男はニヤリと笑うと、ルシアの顔面を押さええている手から炎を出した。

「アゝアアアアッ！！！！」

ルシアの体は炎で包まれた。

男は手を離し、ルシアを地面へと落とした。ルシアの体は焼け焦げ、真っ逆さまに落ちていく。

## 第25話 闇の契約

地面へともうすぐ着くというところで、ドランがやって来てルシアを受け止めた。

「ド…ラン…？」

ルシアは目を開け、ドランを見た。ドランの体はルシアと同じように焼け焦げていた。

「ルシア…大丈夫か？」

と、ドランは喘ぎながら言った。

「ドラン、ごめんね。俺のせいで…」

「なるほど、お前らは闇の契約を行ったのか。フン、弱い人間と契約を結ぶとは命知らずだな」

と、男は嘲笑した。

ドランは歯を食いしばり、男を鋭い瞳で睨みつけた。

「私を侮辱してもいいが、この子を侮辱するのは許さん！！」

「アハハハ」

ドランの言葉を聞いた男は、突然大笑いした。

「ドラゴンのくせに人間をかばうのか！面白い奴だ」

「人間をかばっているつもりはない！私は、ルシアだけだ！！」

「こんな奴をかばってどうする？こいつにどんな価値があるのだ？」

「ルシアは私が初めて信頼した人間の子供なのだ。そして、私はその信頼した人間を苦しめてしまった。だから、これは私の罪の償いであり、私はこの子を護り、運命を共に生きようと誓ったのだ」

「お前がどんな理由でそいつを護ろうとも、その傷ついた体でどうする気だ？このまま死ねばただの犬死に。滑稽だ。契約を結んだのは間違いじゃなかったのかね？」

「契約を結ばなければこの子は死んでいた！私には、この子を死なせる訳には行かなかったのだ」

「ドラン…」

ルシアは、力のない声でドランを呼んだ。

「ドラン、こいつの言う通りだよ。契約を…断とう。そうじゃないと、ドランが死んじゃうよ」

と、ルシアは涙を流しながら言った。

「ルシア…」

ドランはルシアを見つめた。傷だらけになりながらも、自分の事を思ってくれる人間を。

## 第26話 もう一つの真実

「ルシア、お前が育ての親を殺し、血を求めさ迷い、人間に殺されかけた時のお前を見た私は、助けたいと思った。虫の息だったお前を助けなければと。だから私は、お前と命を一つにした。私は後悔してはいない。むしろ、今この時、お前を助けてやれない事に悔しさを感じている」

と、ドランは悲しそうな顔をして言った。

「ありがとう、ドラン。俺、ドランと一緒に生きてこれて良かった」と、ルシアは微笑した。

「さあ、お別れは済んだかな？では、とどめを」と男が言った時、

「お待ちっ！！」

と、老婆のしわがれた声が聞こえた。

「おや、これは先生ではありませんか」

と男は老婆を見て、お辞儀をした。

「お前にこんな事をさせるために、私は魔法を教えたのではない！」

「あのお婆さん……」

ルシアは、水晶玉を持っていた老婆を思い出した。

「お前は自分の有り余る力をコントロールしきれんのじゃ！」

「何をおっしゃるのです。自分の力はちゃんと把握していますよ。」

この街の者達が愚かなだけです。そしてあなたも」

と、男の目つきが変わり、笑みが消えた。

「この街の者達は平和を願い、呪いをかけられた。その時、修業のためにこの街を出ていた私は、呪いの事など知らなかった。私にとつては、幻想のような話だった。だが、新しく生まれ変わった街は、私を受け入れなかった。街の中身はまだ昔のままだったんです」

男は老婆からルシアへと目を移すと、

「呪われし子供よ、何故私が受け入れられなかったのかわかるかい



？」

と、問い掛けた。

「私がこの街に呪いをかけた男の子供だったからだ。この街の連中は、私を殺そうとした！そして、あなたも！！」

男の瞳は、怒りと悲しみに染まっていた。

## 第27話 師を越える力

「お前は、どんな者よりも力が優れておった。だから、危険だとあの頃の私は思ってしまった。あの頃皆、大事な子供らを失い、異常になつていたのじゃ。そう、私もそうだった。すまぬ、サドナ」と、老婆は俯いた。

「今さらそんな事言つたつて無駄です!!」

とサドナが言つと、老婆の足もとに呪いまじなの絵が黒く光つて現れ、強く光を放つと、老婆を包み込んだ。

「サドナっ!」

老婆は持つていた杖を地面に一打ちすると、黄色の光が放たれた。それは老婆の足もとに広がり、サドナの魔法に対抗した。

「今は、あなたより私の方が上ですよ」

とサドナは言い、目の前に手を翳まじなした。

老婆の足もとにあつたサドナの呪いの絵が、老婆を囲むように現れ、黒い光は一つとなり、大きな光へと変わった。

「うわあああつ!!」

老婆は苦しみの声を漏らし、体はボロボロに傷つき、倒れた。

「これでわかりましたか?力の差を」

と、サドナは勝ち誇つたように笑った。

「大分待たせたな」

サドナはルシアとドランの方へと、向き直った。

「ドラン…」

「クッ」

ドランは最後の力を振り絞り、翼を広げ、空中へと飛び立ちサドナと黒いドラゴン目掛けて炎を吹いた。

「頑張りな褒めてやろう」

とサドナは言つて、片手を横に直線に振った。ドランの炎は、サドナから放たれた水で消された。

黒いドラゴンはその瞬間、ドランに向かって青い炎を吹いた。

ドランは攻撃を受け、半分氷漬けになり、地面にたたきつけられた。  
「うつー!!」

ドランと同じ痛みがルシアを襲った。

「ルシア、すまない」

と、ドランは今にも消えそうな声で言った。

「ごめん、ごめん…俺には何の力もない。あるのは、人を殺す力だけ。ごめん、ドランは俺を助けてくれたのに。俺は何もできない」と、ルシアはドランの体に顔を埋めた。

「さあ、死ねっー!!」

黒いドラゴンから、とどめの青い炎が放たれた。

## 第28話 聖なる祈り

（俺は、ドランを助けたい。力が欲しい）

ルシアは祈るように、目をギュツとつぶった。その時、ルシアの耳に声が聞こえてきた。

『ルシア、お前ならできるよ。お前には、ドランを救える力がある』

（父さん…？）

ルシアは顔を上げ、青い炎をじっと見つめた。

「俺の力…」

（ドランを…ドランを助けたい！！）

青い炎は、ルシア達の目の前で弾け飛ぶ。

「な、何だこれは！？」

ルシアが強く思った時、大きな呪いの絵が現れた。

まじな

それは、サドナと黒いドラゴンの真下にまで広がっていた。

「これは…」

と、気絶していた老婆は顔を上げた。

「アルしか使えない最大の魔法、ホリープレイヤー（聖なる祈り）」

まだ夜の明けない空から光が差し、光を身に纏った輝くドラゴンが落ちてきた。

そのドラゴンが呪いの絵の中へと落ちると、呪いの絵は強く光り、辺りを真つ白な光で包み込んだ。

光が消えた後、ルシアはゆっくりと目を開けた。目の前にいたサドナは、黒いドラゴンと共に倒れていた。

「ルシア、一体何が起きたのだ？お前は何をした？」

とドランは傷が癒えているのに気付き、驚いていた。

「父さんが、ドランを助ける魔法を覚えてくれたんだ」と、ルシアは笑った。

「お前さんは、アルにそっくりだねえ」

と、老婆も傷が癒えたらしく、ルシア達のもとへとやって来た。  
「あいつは、どうしちゃったんだろう？死んじゃったのかなあ」  
と、ルシアはサドナを心配そうに見た。

「あんな奴の心配など」

と、ドランは鼻で笑った。

「大丈夫、この魔法は人を癒し、悪しきものを消しとばすものさ。  
あの子は、今は気を失っているだけ。直、目覚めるだろうよ」

と老婆は言い、

「ありがとう、あの子を止めてくれて」  
と、微笑んだ。

ルシアの希望で、サドナが目覚めるまでこの街にとどまる事となった。  
った。

ルシアも、争いの原因となった父の子供もまた、争いの犠牲者。

争いは憎しみを呼び、また憎しみは争いを呼ぶ。

この循環の終焉は…？

「サドナ、もう一人で苦しまないで。俺は君のために何かしてあげたい。君はもう、一人じゃないよ」

ルシアは、ベットで寝かされているサドナに話しかけた。まだ意識の戻らないサドナからは、返事が返ってくる事はなかった。

翌日、サドナの姿はベットから忽然と消えていた。サドナの行方を知る者は誰もいない。

そして、ルシアもこの街から旅立った。悲しい過去を持つこの街から。

ルシアとドランの旅は続く。行く宛てもなく、果てしなく続く道を辿って。

彼らの心が癒え、罪が消えるまで永遠に！。

少年は、罪を犯した。

呪われた手。

もがいても、もがいても

呪いから逃れることはできない。

少年は、今日も紅い涙を流す。

零れ落ちる紅い、紅い滴！。

E  
N  
D

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7307a/>

---

RED DRAGON

2010年10月28日04時11分発行